

## ありがとう、お母さん

上村 かみむら  
昂聖 こうせい

「お母さん、ありがとう。ありがとう。」父さんは、お母さんの手をギュッとにぎりながら、泣いていたんだよ。ほくもなみだが、止まらなかつたんだよ。」

ほくは、この夏、母をなくした。悲しくて悲しくて、泣いてばかりいた。他のことは何にも考えられなかつたけれど、だんだん、いろんなことを思い出したり、後かいをしたりするようになってきた。

母は、体が強くなって、一年生の時から入院したりたい院をしたりのかえしだつた。ほくは、母とわかれることになるなんて思つてもいになかつた。たい院してきた時、もつとお手伝いをすればよかつたな。もつと一緒にいる時間を作ればよかつたな。後かいはかりしてしまふ。

母の料理は、全部おいしかつた。なつかしい。たい院してきた時、いっしょにチャーハンを作つたことがあつた。母が野菜を小さく切つてくれて、それをほくが、いためる。

「おしいよ。」

と母が言つてくれたんだ。忘れられない。お手伝いをもつとしておけばよかつたな。もつと一緒にいる時間を作ればよかつたな。

四年生になつてから母は、一度しかたい院ができなかつた。点をきをしている母は、とてもきつそうで、

「大じようぶ。大じようぶ。」

と声をかけながら背中をさすつてあげるくらいしかできなかつた。

きつはずなのに母は、うれしそうな顔をして「昂聖、ありがとうねえ。」

と言つてくれた。今思うと、一年生の時に病気が見つかつて四年生まで母は、本当によくがんばつたなと思う。やさしい母のことだから、きつと、自分のためでなく、ほくや父さんのためにがんばつたんだと思うと、またなみだが出てきそうになつてくる。

今、ほくは、父と二人でがんばっている。母が、病院にいる時も父と二人の家だつたけれど、今はやっぱり何かがちがう。一人でねる時、母のことを思い出してなみだがでてくることもある。

母は、自分の命をもつて「命を大事にしなさい」つてことを教えてくれたんだと思う。絶対に忘れない。父さんとお母さんのおかげでほくは、生まれてきたこと。たくさんの人に支えられて大きくなれたこと。絶対に忘れない。

「お母さんがいない今は、さみしいけれど、大じようぶだよ。最初は、つらかつたけれどお父さんも友達もいるから大じようぶだよ。それに、空の上からお母さんがいつも見守つてくれていると思うと温かい気持ちになれるよ。お母さん、ありがとう。」